

## 「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	東京外国語大学	拠点番号	D06
申請分野	人文科学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	言語運用を基盤とする言語情報学拠点 (Usage-Based Linguistic Informatics)		
研究分野及びキーワード	＜研究分野：言語学＞(談話研究)(教授法)(e-learning)(コーパス言語学)(学習理論)		
専攻等名	大学院地域文化研究科地域文化専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 川口 裕司 教授 他 11名		

### ◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

＜本拠点がカバーする学問分野について＞

言語学、言語教育学、応用言語学、教育工学、情報工学

＜本拠点の特色及びその目的等＞

情報工学の基盤の上に言語学と言語教育学を有機的に統合し、言語情報学という新たな統合的学問分野の世界的な拠点を創成しつつ、多言語のTUFSS言語モジュールと呼ばれる世界的にみても類例のない成果を生み出す。同時に、それを応用し、多言語e-learningシステムを開発し、インターネット上に公開する。内部・外部の評価に基づく言語能力評価基準の確立も図る。ボーダレスな多言語時代に入った現在、IT技術に裏づけされた多言語e-learningシステムの構築は不可欠であり、また本拠点による、高度な言語運用能力をもち、IT技術を駆使した先端的な言語教育を行いうる優秀な若手研究者の養成は言語教育の現場の長年のニーズに応えるものでもある。

＜COEを目指すユニーク性＞

本拠点の目指すものは、今までにない言語運用の理論的分析に基づくTUFSS言語モジュールの作成とそれを素材とした多言語e-learningシステムの構築である。このプロジェクトは、言語研究者と言語教育研究者と情報工学研究者の協働作業によって推進される。三つの学問分野間の相互的なフィードバックはもちろんであるが、個別言語間(特に欧米語とラオス語、カンボジア語、モンゴル語なども含むアジア語)の双方向的なフィードバックも可能になっている。なお、日本人が日本語で外国語を学ぶためだけでなく、外国人が日本語をそれぞれの言語で学ぶことのできるシステム(多言語版モジュール)の作成も本プロジェクトのユニークさになっている。

＜本拠点のCOEとしての重要性・発展性＞

アジアに位置する本学が国際的な言語情報学の拠点となり、アジアの諸言語を含む独自の多言語モジュールを情報工学の基盤の上に開発することは、従来の欧米中心の言語研究や言語教育のあり方に新たな風穴を開けることになり、きわめて価値あることである。本拠点は21世紀COEプログラム終了後、本学の将来構想の一つである「地球社会先端教育研究センター(仮称)」の中の言語情報学拠点として位置づけられ、ボーダレスな多言語時代の21世紀の言語教育にふさわしい先端的多言語e-learningシステムを絶えず高度化しつつ世界に向けて発信する。

＜本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果＞

- ・17言語を擁するTUFSS言語モジュールが開発され、多言語e-learningシステムが実現する。なお、ユビキタス環境によるe-learningシステムの基盤も完成する。
- ・同システムを用いた言語教育の実践に基づく独自の言語運用能力の評価モデルを確立する。
- ・言語運用の実態に基づく多言語データベースや談話コーパス等が方法論の検討を踏まえて構築される。また、その成果をオランダのBenjamins社のシリーズ『言語情報学(Linguistic Informatics)』として出版する。
- ・ボーダレスな多言語時代の21世紀にふさわしい言語情報学を専門とする若手研究教育者を養成する。

＜背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等＞

17言語の多言語e-learningシステムは世界初の試みであり、言語教育分野に新しい可能性を開く。特にインターネットを通じて公開される多言語版モジュールは、国内外の言語教育に革新的な変化を起こすものである。本プロジェクトの研究成果はすでに海外の学会でも高い評価を受けた。なおTUFSS言語モジュールを基にした独自の言語能力評価基準も確立しつつある。多言語を対象とした言語能力評価基準としては米国のACTFLや欧州議会の枠組み等があるが、これらは欧米のような多言語多文化社会における言語教育を念頭に置いた基準であり、本拠点はこれに対して、欧米のみならず広くアジアにおける言語教育の高度化につながる評価基準を構想する。

機 関 名	東京外国語大学	拠点番号	D 0 6
拠点のプログラム名称	言語運用を基盤とする言語情報学拠点		

◇ 21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、下記のコメントに留意し、当初計画の適切なる変更が必要であると判断される。

(コメント)

「従来の欧米中心の言語研究・言語教育のあり方に新たな風穴」をあけるといいう大きな目標に向けて、以下の3点に十分留意して、当初計画に適切なる変更を加えて、研究の推進を望みたい。

①言語学と言語教育学を統合した「言語情報学」の拠点形成という採択時の構想がどこまで実現されうるのか、現状のままでは疑わしい。「言語情報学」とは何なのか、COE終了後の拠点の姿がどのようなものなのか、具体的な成果を出してほしい。

②組織的な語学教育の実績がある大言語をもっぱら対象とした教材開発にとどまっているので、研究所を持つ東京外国語大学のプログラムとしては、学習の便に恵まれていない小言語の研究教育をも直接に組みこむ視野の広さが強く望まれる。

③アジア言語を中心とした言語情報学という学問を構築されるのであれば、アジア言語とはそもそもどのような言語体系であるのか。個々のアジア諸言語の教材開発にとどまらず、全体化の視点を出してほしい。